

# 関西大学天六学舎の建築について

橋 寺 知 子

## 一 はじめに

学びの場がどこに、どのような環境にあるかということは、その学校の校風や学生の探究心の向かう方向に大きく影響を及ぼすと思える。大阪は、明治初期には近代の科学技術学習の中心地としての役割を担い、さまざまな高等教育機関が設置され、産業界とも連携していた。関西大学の発祥の地は、大阪の中心部である。戦前期の大阪の隆盛は、「大大阪」時代という言葉で語られるが、実学を中心とした関西大学の校風は、まさに大阪らしい大学と言えるだろう。関西大学は、大正期、充実した環境を求めて、当時は人家も少なかった千里山にキャンパ

スを移転した。天六キャンパスは、現在、唯一大阪市内に在する関西大学のキャンパスである。大阪市内では、大阪市立大学（大阪市住吉区）のように、周縁の郊外には戦前期の大学の学舎が現存するが、都心にあった大学は、現在は移転し、学舎も解体され、その面影はない。今も昭和初期からの建築が残る関西大学天六学舎は、大阪における高等教育機関の歴史を考えても、重要な建築遺産になりつつある。

本稿では、天六キャンパスの沿革を整理した上で、現存する天六学舎の主校舎部分の建築について、その概要を関西大学に残る文書や建築図面から明らかにする。また今後の活用の可能性も踏まえ、その建築的価値につい



昭和45年頃の天六学舎

て述べておきたい。

## 二 天六キャンパスの沿革

『関西大学百年史』<sup>①</sup>をもとに、天六キャンパスの沿革を見ておきたい。

大正一一年に千里山へ予科と学部が移転した後も、福島学舎には専門部（夜間）と関西甲種商業学校、関西大学第二商業学校が残り、狭隘な環境の中で勉学を続けていた。福島学舎と新築移転した千里山学舎の環境の差は大きかった。大正一四年に鉄道省から東海道線の拡幅高架化のために福島学舎の一、三、七、九坪のうち二〇〇坪を収用する申し入れがあったのを契機に、学舎の移転が検討され、大阪市から大淀区長柄中通二丁目の市有地二、二一、四坪の払い下げを受け、学舎を建設することに決定した。この地の周辺環境は、すでに人家や工場が密集し、墓地や葬祭場も近接し、教育環境として最適とは言えなかったが、新大阪天神橋筋六丁目駅に近く、千里山学舎と鉄道での連絡が容易であること、昼間働く専門部の学生にとって、交通の便のよさは何より重要な通学条件である

ことから決定された。

新校舎は昭和四年九月一五日に竣工した。鉄筋コンクリート造地上四階地下一階の校舎は大林組の施工で、延床面積は約七、〇〇〇平方メートル、福島に比べ、敷地は約二倍、建物は約四倍の広さとなった。

せつかく新築した多くの教室群を、昼間も活用することを企図し、昭和五年四月、昼間専門部が開設された。関西甲種商業学校の定員増加や第二商業の生徒数増加もあって、教室が再び不足し始めた。混雑解消のため、増築が決定され、昭和一〇年三月に、「大学本部」が竣工した。この新築部分には大学の本部機能を集約し、先に建てた校舎部分はすべて教室として使用することになった。建築面積は四六六・六平方メートル、延べ面積は二、二八九・三平方メートルに及ぶ。昭和四〇年に千里山に関西大学会館が竣工するまで、法人本部の所在地は、天六学舎のある大阪市大淀区长柄中通二丁目であった。まもなく昭和一二年三月には、旧館の北側屋上に大教室二室を増築した。学生数が急増し、授業を立ったまま聴講する状態だったが、学舎隣接地の買収が難航したた

め、窮余の策としての屋上への増築だった。

昭和戦前期には戦局の悪化とともに、高等教育機関は、学生の減少やさまざまな統制、学校規模の縮小、修業年限の短縮など、さまざまな苦難を経た。文科系は縮小され、大学存続さえ危ぶまれた。関西大学も生き残りを考え、理科系学科の設置を模索した。学部の設定は見送られたが、専門知識を持つ技術者を養成するため、昭和一九年四月、関西工業専門学校を天六学舎に開設した。機械科一科で、一般機械、船用機械、航空機械の三専攻科があり、修業年限三年と定められた。戦時下において、施設の充実は望めず、実習については実地教育を重視する方針を定め、学生は長期実習を発動機製造会社などの工場で受けた。

昭和二〇年三月から大阪市内は空襲が激しくなり、六月七日の爆撃で天六学舎周辺も焼失したが、職員の消火活動の甲斐もあって、木造の学生控所の一部が焼けただけだった。天六学舎は大阪市の避難場所に指定され、罹災者であふれ、終戦後もすぐには授業再開の目処が立たなかったと言う。

昭和二二年四月には、新学制すなわち六・三・三・四制が実施された。関西大学では、大学院、四年制大学、三年制高等学校、三年制中学校を経営することを決定し、大学予科と専門部（第一部・第二部）は解消、関西甲種商業学校を解消して新制高等学校へ改編することを決めた。昭和二二年四月、関西大学第一中学校が発足、翌年、第一高等学校が発足した。両校は天六学舎でスタートし、昭和二八年一〇月に一高が、三三年一月には一中も千里山へ移転した。専門部と工専はしばらく新制大学と並存していたが、昭和二六年三月、最後の卒業生を送り出した。

昭和二三年四月、関西大学は新制大学として認可された。当初は第一部（昼間）も第二部（夜間）も千里山で講義を行なったが、勤労学生にとっては、千里山へ登校するには時間がかかり過ぎた。専門部と工専の廃止によって天六学舎に余裕ができたことから、昭和二七年四月には、第二部一年次の授業が千里山から天六へ移され、翌二八年四月には、第二部すべてが天六へ移った。同年、天六学舎では本部建物の西側に新館が増築された。天六

学舎の体育施設は貧弱だったが、昭和二九年六月、ついに隣接地の買収がまとまり、昭和三一年四月に体育館が竣成した。

昭和三〇年前後には、天六学舎は第二部のみが使用する学舎となり、昼間の有効利用が課題となった。戦中の工専の設置の経験も活かし、昭和三三年四月、工学部（機械工・電気工・化学工・金属工の四学科）が設置され、天六学舎で開講した。構想の段階では、一般企業工場に協力を仰ぐ協力実習場制が関西大学工学部の特色の一つであったが、実際には非常に難しかった。最小限必要な実験室が地下に作られたが、不十分な設備により、臭気などの問題が起こった。狭い天六学舎では工学部の経営は難しく、昭和三四年、千里山キャンパスに実験実習場五棟が建設された。講義は天六で、実験は千里山で行なわれ、貸切バスで移動した。天六学舎近隣地の買収はかなわず、理事会は方針を変え、工学部は千里山へ集約することにになり、昭和三五年九月、工学部本館（現第四学舎一号館）が竣成した。

昭和三〇年頃、千里山では法文学舎の新築など、キャ

ンパスに大きな変化が起こっていた。昭和二四年竣工の大学院ホールをはじめとして、昭和五年頃まで、建築家村野藤吾がキャンパス計画に大きく関わっていた。<sup>②</sup>昭和四二年、天六学舎では、村野森建築事務所的设计により、本部建物の屋上に研究室が一階分増築された。

工学部の移転以降、天六学舎は再び第二部（夜間）の学舎として使用された。学生の厚生施設としては、昭和三八年に有鄰館が完成し、四二年には増築され、三階建となった。

時代も変わり、第二部に期待されるものも大きく変化した。平成六年、第二部は千里山へ全面移転し、平成九年にはエクステンション・リードセンターが天六学舎で開設された。その後も天六学舎の利用形態は変化し続けているが、学ぶ社会人にとって便利な立地であることから、大学院のサテライト授業や市民向け講座の会場などに利用されている。<sup>③</sup>

### 三 天六学舎の建築について

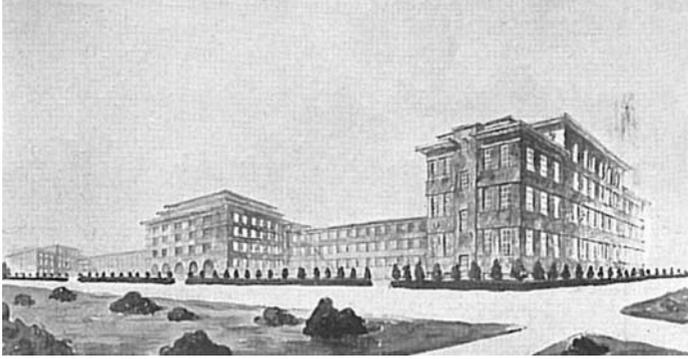
— 管財グループ保管の書類から

管財局管財グループには関西大学の施設に関する書類が数多く保管されている。天六学舎については、五冊の綴った文書と封筒に入れられた一書類が確認できる。<sup>④</sup>綴じられた文書は、確認申請等に際し作成された書類であり、新築・増築・改修工事の概要が分かる基本的な図面一式が綴じられている。五冊は、新築あるいは各増築工事に関わるもので、これらを年代順に整理し、順次建設された学舎の各部分の建築的特徴を明らかにする。

#### (1) 旧館（昭和四年）

旧館、すなわち敷地の東側から北側へ続くL字形の部分が最初に建設された。昭和三年七月付けの大林組による見積書が添付されている。綴られている図面には、日付や担当者名、製図者名などの記述が一切見られない。<sup>⑤</sup>

昭和四年一月の『建築と社会』に、関西大学天六学舎として、各階平面図、外観と講堂の内観写真、そして



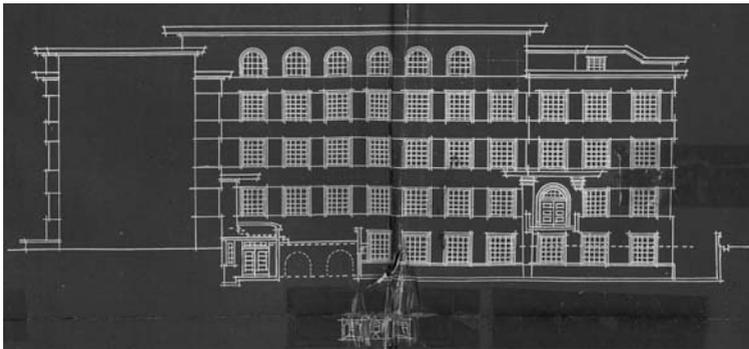
天六学舎全景の透視図 「建築と社会」昭和4年11月号から転載



旧館 窓廻り



天六学舎旧館 現在

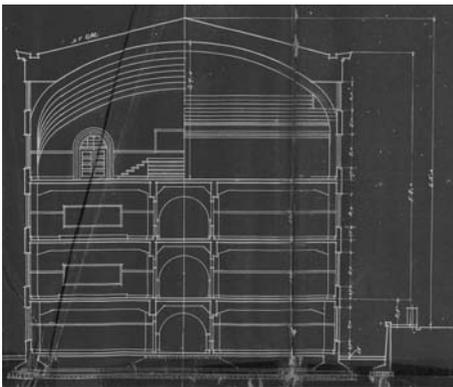


旧館 西立面図

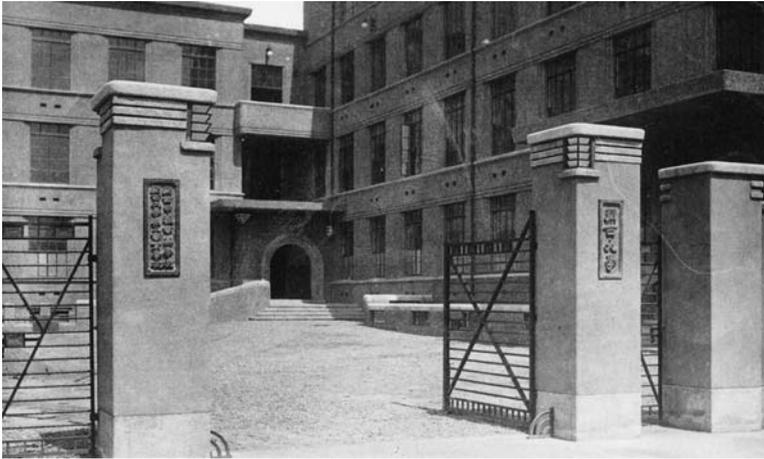
全景の透視図、新築工事概要が掲載されている。そこでは、「設計者島田建築事務所、施工者大林組」と記載されている。「建築と社会」掲載の透視図は、昭和四年に竣工した部分だけではなく、敷地全体の計画が描かれている。管財グループ所蔵の書類中の配置図には、点線で全体の構想が描かれており、その外形と透視図は一致している。一気に建設することは叶わなかったが、かなり大きな規模の学舎を計画していたと考えられる。

旧館部分の建築的な特徴は、鉄筋コンクリート造で合理的な建築でありながら、出入り口や窓廻りには線型や装飾が施され、当時流行していたアール・デコ様式のデザインが見られる点である。新築工事概要には、様式は「近世自由式」と記載されている。外壁は五色の玉砂利洗出し仕上げで、水平線が強調されたデザインである。平面はシンプルで、東側部分の一、二階は中廊下型で事務室や教室、三、四階は大講堂である。北側部分は三階建てで、廊下を北側に配し、南側に教室が並ぶ。大講堂は二階席（ギャラリー）があり、ヴォールト形の梁が天井にそのまま表れており、ダイナミックな空間である。戦

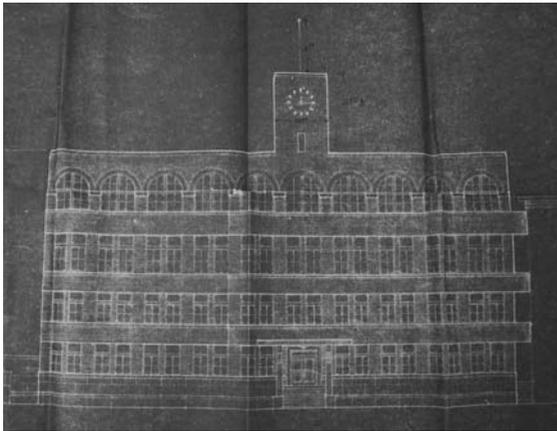
前期、学校建築では講堂にヴォールト形天井がよく用いられたが、竣工当初の雰囲気がよく残っている。校舎だけでなく、正門のデザインも非常に凝ったものになっている。校舎以上に、アール・デコのデザインが華々しい。現在は正門が敷地の西側に移動し、もとの南側の正門は使われておらず、校名がかかっていた銘板も外されている。



旧館 断面図



竣工当時の正門



本部 南立面図

(2) 本部（昭和九年）  
旧館に続いて増築されたのは、『関西大学百年史』で「本部」と表記されている中央部分である。大林組の設計施工で、この工事に関する図面には、図面名等の記入枠が描かれ、大林組の社名と担当者・黒田茂の捺印がある。



昭和10年頃の天六学舎

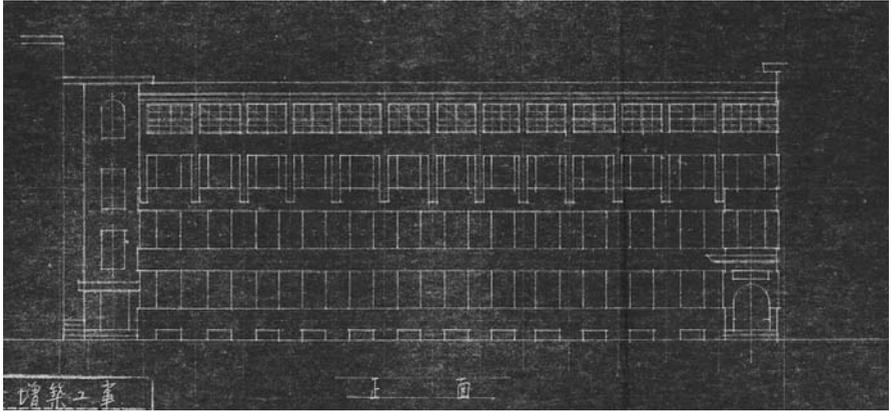
建物の名前が示す通り、法人の本部機能を集約し、建設時点では事務室や会議室等が計画された。

外観のデザインは、中央少し東寄りに時計台がそびえ、最上階四階には大ぶりのアーチが連なる、かなり目を引くデザインである。南面壁面は「葉掛長手タイル張り」、北面は比較的大きな割り付けの「色モルタル目地切り仕上」で、表裏の外観がかなり異なる印象を持つ。二階から四階の東寄り六スパンには、角部に丸みのあるバルコニーが付され、水平線が強調されている。水平線の強調や角部での曲線の使用、左右非対称のデザインは、一九三〇年代の初期モダニズムのデザインがよく表れている。

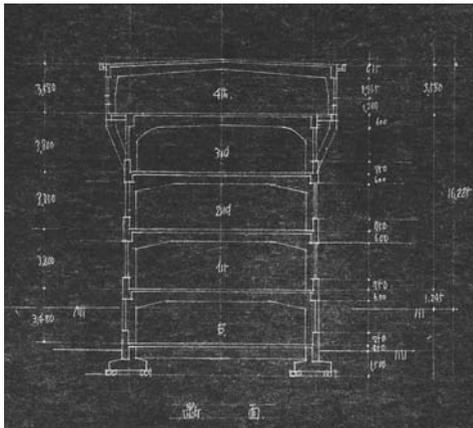
現在、この本館の外観は、後に建設された新館と同様に、白色のペンキ塗りに変更され、開口部のサッシも取り替えられているが、玄関廻りの仕様や窓の割付けなどは、ほぼ竣工時の意匠が保たれている。

### (3) 旧館四階の増築（昭和一二年）

昭和一二年には、旧館北側の屋上部分に、大教室二室が増築されている。大林組の設計施工で、図面には大林



旧館 4 階増築 立面図



旧館 4 階増築 断面図



旧館 4 階増築部

組設計部の図面枠が設けられ、本部の建設と同じく、担当者として黒田茂の捺印があり、さらに当時の大林組の設計部長、今林彦太郎の確認印も捺されている。

前章で述べた通り、教室のスペース不足を補うための窮余の策としての増築だった。旧館の屋上から、鉄骨構造で、両側に一・三五mずつ床を張り出し、一四・五二m幅の大教室二室を確保した。外観には、張り出した床を支えるため、三階部分にバットレスが表れ、旧館の従来の意匠とは全く異なるデザインのもので、覆い被さるように付加されている。旧館と本部は、指向性はことなるものの、それぞれ外観の意匠には配慮が見られる。旧館の意匠とは全く異なる四階の増築は、少々乱暴な、機能や効率のみを優先しているように見える。だが表に現れたバットレスは力強く、それもまた、外観上の特色と言えなくもない。

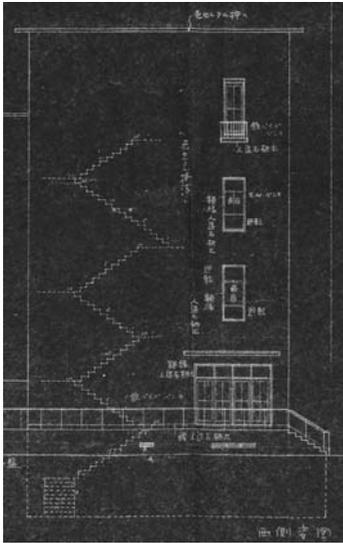
#### (4) 新館（昭和二八年）

第二次世界大戦期から昭和二〇年代の間、天六学舎を利用していた組織がめまぐるしく変わったことは前章で

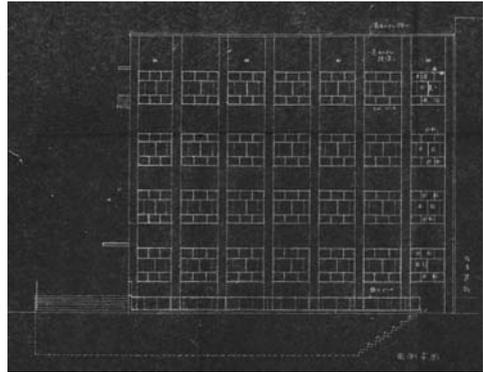
述べた。利用の仕方が変われば、建築にも何らかの変更があつたと考えられるが、この時期の改修の記録は、管財グループ所蔵の書類では、残念ながら見いだせない。

昭和二八年に、新館、つまり現在の西側の正門に最も近い部分の校舎が、本部に接続して増築された。昭和三〇年頃、千里山では竹中工務店が施工を多く担っているが、この新館も竹中工務店の設計施工である。図面には担当者として松本洋の名前があり、当時の設計部長小川正の印も確認できる。

一階から三階には教室が一室ずつ、最上階四階には、研究室九室と事務室が配された。地階には食堂が設置されている。外観の意匠は、特に凝ったものではない。柱が規則正しく合理的に配され、それが外観にもそのまま表われている、戦後モダニズム建築の典型とも言えるデザインである。だが開口部のサッシュの割付などのプロポーションは美しく、窓割りは少し凝ったものになっている。一階玄関ポーチは広々として、西面妻側の立面もシンプルだが出入口や窓がデザインのアクセントとなっている。



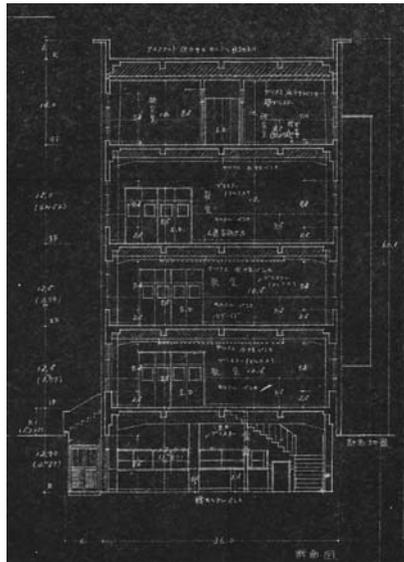
新館 西立面図



新館 南立面図



新館



新館 断面図

現在では、サツシユは取り替えられているが、四階のサツシユの割付は、竣工当初のものが踏襲されている。

#### (5) 本部五階の研究室増築（昭和四二年）

この部分の増築に関しては、これまで天六学舎の建設に関して記述された文献では触れられていないが、昭和四二年、本部屋上に、象徴的な時計台を取り込むように、研究室四室が鉄骨構造で増築された。設計は村野森建築事務所、施工は東洋土建株式会社である。昭和二〇年代後半から、千里山では村野藤吾がキャンパスの計画に参画し、特色あるキャンパスを創り出しつつあったが、天六学舎のそう規模の大きくない増築にも、村野森事務所が関与していたことが確認できた。

デザインには、特に村野藤吾らしさが表われているとは言えないが、本部建物外観の特徴ある連続アーチのデザインに倣ったのではないかと思える。文書の綴りには、昭和九年に大林組によって描かれた立面の詳細図の複写が含まれ、既存建物との関係を意識していたと考えられる。

## 四 まとめ — 天六学舎の建築的価値

東西に細長い敷地いっばいにL字形に建設された天六学舎は、増築に増築を重ね、様式的統一がなく、また経年変化による汚れも目立ち、見映えという点で言えば、パツとしない。だが、それこそが、関西大学が苦勞しながら教育環境を整え、広くさまざまな人々に学びの場を提供してきた歴史の一端を物語っているのであり、この学舎で学んだ人々にとっては、それぞれの時代の痕跡が残る場所は、かけがえのない貴重な記憶のよりどころとなっている。継ぎ接ぎの建物の各部分は、少なくとも外観は、それぞれの時代の建築的特徴をよく表しており、大阪市内では少なくなった戦前期の教育施設の事例として貴重な価値を持つ。

旧館は特に昭和初期の学校建築の遺構としての価値が認められるだろう。四階の講堂は、昭和戦前期の学校に典型的に見られる講堂の雰囲気をよく残している。教室の大部分は、長い歴史の中で改修がなされ、創建当初の様子はほとんど残っていないが、各入口部や外壁の仕上



本部5階増築後の天六学舎

げはよく保たれている。南側の塀や旧正門は、痛みが少し進んでいるが、昭和初期のアール・デコ風の意匠がよく残る。本部は、デザイン的には一番凝っていて、目を惹く部分と言える。旧館とは五年しか建設年が変わらないが、デザインの指向性はかなり異なる点が興味深い。

近年、少し古い建物を現在求められる性能を持ったものへ改修したり、教会堂を書店やレストランといった、ちよつと意外な用途へ転用する試みが積極的になされている。近代建築がもつ、ちよつと古ぼけた雰囲気は、その全盛期を知っている中高年には懐かしいし、当時を知らない若い世代には逆に新鮮なようだ。耐震補強やバリアフリー化など、現代のニーズや性能基準に適合する改修は必要だが、同時に、歴史が体感できる場所の創出も期待できる。

天神橋筋六丁目には、かつては新京阪のターミナルがあり、大阪から京都への玄関口だった。その利便性が、関西大学が天六を学舎建設地として選んだ一つの理由だった。そのターミナル駅は超高層マンションに建替えられたが、新ビルのデザインには旧ターミナルビルのイメ

ージが盛り込まれたと聞く。天神橋筋六丁目駅周辺には昭和戦前期の近代建築は少なくなり、天六学舎とその南側に数棟が残るのみである。大阪市内、特に北部には、戦前期の学校建築はほとんど残っていない。各時代の建築の特色が表れた天六学舎は、本学の歴史を語る上でも、また地域史においても、貴重な価値を持つと言える。

注

- (1) 関西大学百年史編纂委員会編『関西大学百年史 通史編』上巻、五六九～五七七頁、六〇五～六〇七頁ほか、昭和六一年、下巻、三一頁、四六頁ほか、平成四年、『関西大学百年史 資料編』、平成八年
- (2) 村野藤吾と関西大学千里山キャンパスに関しては、川道麟太郎「関西大学における村野藤吾の建築とその後」、『関西大学博物館紀要』第一〇号、二〇七～二二八頁、二〇〇四年に詳しい。
- (3) 関西大学年史編纂委員会編『関西大学一二〇年のあゆみ』平成一八年
- (4) 管財局管財グループに保管されている天六学舎関係の文書は次の通りである（いずれも背表紙タイトルや

- (5) 『関西大学百年史 資料編』によれば、「建築請負大林組、監督技師島田良馨」（四二三頁）とある。昭和初期の『建築と社会』によれば、島田良馨は大阪市西区西長堀北通に所在した島田建築事務所を主宰していた。

(は) してら ともい 関西大学環境都市工学部准教授